

## 黄土高原に咲く目にも彩なる花々・剪纸 II

### 第1章 高鳳蓮の生い立ち 陝北黄土高原の生活

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

陝西省延川県地方は、陝北黄土高原のど真ん中で、平均海拔は1000メートルになります。黄土の高原の中を、深い谷が縦横に走り、現地の人々が「溝」と呼ぶ、無数の深く小さな流れが皆、西から東へと延び、その先にある川へと流れ込んでいます。川は合流する度に大きくなり、やがて北から南へと流れる大きな河となります。小さな流れは高原の土を運び、高原の土を含んだ水が集まって、黄色い水が滔々と流れ、人々が「黄河」と呼ぶ大河に流れ入ります。



陝西省北部の黄土高原地帯はあちこちに地割れのような深い谷が刻まれている

陝北地方の《信天游》と言う民歌は「太陽が黄土を干し上げ亀裂を作り、雨水がその亀裂を谷にする。風が地表を削り吹き飛ばす。陝北はこのようにして作られた」と、その成り立ちを語っています。

延川県は隋の時代には既に存在し、1400年以上の歴史がありますが、剪纸芸術はそれよりも古いのです。その起源は、招福・厄除け祈願の民族風習です。農耕文化の中で生まれ、主として女性が受け継いできた民間芸術です。延川地区には、中華民族の始祖である伏羲が長く活動の拠点とし

たとされる遺跡があり、この地で八卦を考案したと言い伝えられています。

悠久の黄河文明に育まれたこの地では、剪纸の題材が豊富で、神仙仏像・吉祥図・農作業・伝統行事・人物・民話伝説・鳥獣花卉等、身の回りのあらゆるものが取り上げられ、素朴な中でも、伝統に裏打ちされた細やかで、作る人の情熱が迸る図柄が多く見られます。剪纸は、窓飾り・壁飾り・天井飾り・行燈などに使用されており、剪纸そのものが北方農耕社会の縮図であり、人々の生活を垣間見ることが出来る大パノラマだと言えるでしょう。

延川地区は、黄土高原のど真ん中に位置していますので、交通の便は悪く、政治・文化の中心から遠く離れています。しかし悠久の黄河の流れが、北方各地各民族の文化・風習・人情の取り込みに大きな役割を果たしました。歴史的に多くの国家が興亡を繰り返しましたが、政治的な交代や、平和時には穏やかな交流によって多民族の融合が



毎年春節15日はヤンゲー隊が繰り出されてにぎやかに踊る



高鳳蓮さんが幼年時代を過ごした窑洞(ヤオトン)

図られ、現在の多元的で豊富な民族文化が確立されました。延川県周辺は、自然の「気」が集まって、優秀な人材を育み、文才すぐれた人材を輩出すると言われ、歴史的に「文出両川、武出三辺」との言葉が存在します。「両川」とは現在の延安市宜川県および延川県を指し、「三辺」とは榆林市の定辺・安辺・靖辺を指します。地域的にも、歴史的にも多くの偉人を排出していますが、最近特筆すべきは、文化大革命の時代、文安駅郷梁家河村に下放された習近平が、国家の指導者の一人となっていることでしょう。

朝、太陽が黄土高原に顔をのぞかせ、延川県文安駅鎮白家塬村を照らし始めた頃にはもう、この村に住む高鳳蓮は、彼女の剪紙芸術館の掃除を始めていました。高鳳蓮芸術館は、彼女の家の庭に建てられていて、8穴並んだ窑洞の中の6穴を使って、彼女の剪紙・布画の作品を展示しています。ここに展示されている一連の作品の全ては、中国農村のごく普通の主婦が「中国第一の剪紙技能者」と称され、国連ユネスコと中国民間芸術家協会の連名で「剪紙芸術名人」に指名された高鳳蓮その人が、この地での60年余りの歳月の中で制作したものです。

高鳳蓮は、1935年2月、延川県の東北のはずれ、黄河に近い高家圪台

郷と言う村で生まれました。彼女の母親の話では、生まれると直ぐ丸一日泣き続けたそうで、祖母は「生まれたばかりであんなに泣くななんて、おおきくなったら、気性の激しい子になるだろう」と言いましたが、母親は、「この子は、他の子供と違う。きっとすぐれた人間になるだろう」と思いました。

高家は、この一帯の豊かな地主で、家は石造りの窑洞で、庭には黒い石板が敷き詰められていました。祖父の家の前には、威風堂々とした一对の石の獅子が置かれ、その首には珠の首飾りを掛け、口の中には宝珠を含んで、日夜屋敷を護っていました。その獅子は、石の産地に特別注文して造らせたものでした。しかし、父親の代になると、家運は徐々に傾き始めました。高家圪台村には、黄河の渡し場があり、县城へ通じる街道があります。黄河の渡し場は限られたところにしかないので、渡し場があると言うだけで交通の要衝となり、戦争ともなると、地域の被害は大きくなります。

往時の勢いを失ったとはいえ、やせ衰えてもうクダは馬より大きいと言われるように、高家の広大な屋敷は、戦争の度に各軍隊が食堂や、宿舎として必ず徴用する場所でした。特に、1947年、革命期に中華民国軍の胡宗南部隊が黄河を渡って、延安を襲撃した時は、丘の上も川筋も、まるでイナゴが大発生したかのように、黄砂を巻き上げて進軍して来た兵士たちで埋め尽くされてしまいま



現在の高家は、八穴が並ぶ石造りの立派な窑洞(ヤオトン)だ

した。こんな状況は、それまで見たことがなかったので、人びとは家を捨て、家族で親戚を頼って避難しました。高家は多少の財産があるので、父母は残って家を護り、12歳の高鳳蓮が8歳の弟を連れ、羊の群れを率いて山の奥に隠れて、軍隊が立ち去るまで息をひそめていました。



生涯労働に明け暮れた高鳳蓮さん

解放後は、当時の状況から見て、学校に入って文字を学ぶことは出来たのですが、高家の家訓は厳しくて、経済力が衰えたとは言え、昔からの三従四徳(女性は親・夫・子に従い、品德を保ち・言葉を慎み・容姿を整え・家事に励むという四徳を備えるべし)の教えを守り、学校へは行かせてもらえませんでした。女性は能力の無いのが徳、儒教の教えを護れば良いとされ、部屋の中で針仕事や手芸をしながら、嫁入り後の家庭の維持・子育ての知識を学べば良いと言われて育ちました。しかし、小さい時から梓には収まらず、ずば抜けて賢い少女だった高鳳蓮は、針仕事にもすぐに熟達し、手早く仕上げては余った時間で鋏を使い、何でも目に付いたものを切り出しました。豚・猫・スズメ等題材は何でもよく、臨機応変にその場で見たものを切り出しました。この時の剪紙は、単なる興味・趣味で切り出されたもので高鳳蓮自身の少女の夢を切り出していただけでした。

高鳳蓮の母親は、一般的な陝北のおばあさん同様、剪紙が上手で、衣服や布靴の模様を沢山作りました。賢くて手先の器用な母親が切り出す模様は生き生きとした迫力がありましたので、村で葬式や結婚式がある時はいつも手伝いを頼まれて、吉祥飾りや美しい草花を剪っていました。隣人や親戚の人達は、普段でも事ある毎に彼女に剪紙を依頼するのでした。そんな中で、高鳳蓮も知らず

知らずのうちに影響を受けましたが、彼女の剪紙には彼女独自の雰囲気があるものでした。紙が十分ではないので、古い対聯(ついでん 対句を記して門の両脇などに貼る)を剥がして使いました。伝統的な窓飾りや靴の模様を練習する傍ら、高鳳蓮は、何やら抽象的なものを切り出しました

が、それらには活力がみなぎっていました。

今は老人となった高鳳蓮ですが、彼女は昔から自分の剪紙を、これは何、あれは何と説明はしません。自分の娘に対しても同じ態度で、自分で理解し創り出すことが大切だと考えています。彼女は常々言います。「教えられて剪った形はそれだけのもの。自分で見つけた形は生きている。自分で技を磨いて剪り出してこそ生きた形になる」。

若い時から、高鳳蓮は強い人で、農作業は全てこなし、空いた時間には鋏を握って放しませんでした。彼女には剪紙の先生はいません。小さい時から鋏を使うのが好きで、家畜に作業をさせた時は家畜を剪り、雪が降れば雪の花を剪るといった感じで剪紙を楽しんでいました。始めたばかりの頃は決して上手くはありませんでしたが、練習を重ね、工夫を凝らしているうちに、鋏が自在に使えるようになり、歳を経るにつれて、彼女の感性が剪紙に溢れ出てくるようになり高鳳蓮独自の芸術性が醸成されだしました。

剪紙は、延川地域で先祖代々受け継がれて来た生活の一部分です。村中を巡って、家々のオンドル飾り・天井飾り・テーブル飾り・結婚式の祝飾り・門神飾り・カーテン飾り等を見ると、地域の人々のありのままの生活の様子が見て取れます。毎年、春節になると、村人たちは窓に白い紙を貼り、その上に赤い紙の剪紙を貼って窓飾りとして新年を

祝います。12月は農閑期なので、延川地域の女性たちは一堂に会し、お互いに剪紙の模様を教え合い、誰が上手に出来るか競争しながら剪り方を学びます。お正月には、お互いの家を訪問し合い、何処の家の窓飾りが良く出来ているか、何処の家の嫁が剪紙を上手につくるか、誰の剪紙が村人全体の尊敬を受けることが出来るかなどとあちこちで勝手に品評会を開きます。

黄土高原に住む人びとは、生まれると直ぐ、如何にして「腹を満たすか」と言う大きな問題を抱えており、そのことで一生苦労します。自然環境が厳しい分、都市部に住む人びとと比べて、精神的にも肉体的にも苦労が多いといえます。陝北の人々は、「生」を大事と考えます。彼らはしばしば「仔豚でも三升の糠を持って生れて来る」と言いま

すが、その意味は「どんな命でも皆生きる権利がある」と言うことです。そうは言っても、黄土高原での生活は苦労が多くて大変でした。水汲みにしても、今でこそポンプが普及してモーターで高いところまでくみ上げていますが、昔は険しい崖を下って川まで水を汲みに行きました。そんな中で、人々は剪紙に心の慰めを見出していました。厳しい生活に疲れた時は、剪紙で美しい花々や、楽しい情景を切り出して心を楽ませ、天災や病魔に襲われた時は、剪紙に招魂や厄除けを祈り、富と栄光に恵まれた時は、剪紙を通して、変わらぬ神のご加護を願いました。

つまり、黄土高原に住む人びとは、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、剪紙と共に生活して来たと言えるでしょう。